



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

CITATION:

花山だより. 天界 1930, 10(113): 303-303

ISSUE DATE:

1930-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161564>

RIGHT:

心と自覺とに缺くる所があるのでは無からうか？ あへて、學内學外の諸賢の一考を煩はす所以である。

我が日本民族の理學研究能力を歐米人の其れに劣るとする一派の評家に告ぐ。「枯く、歐米人と吾が國人とに均等なる研究機會を與へよ！」現在の如き明白なる機會(設備)不均等のハンデキャップを與へて、彼れと我れとの優劣を比較するは不當も甚だしいではないか！

花 山 だ よ り

七月の初め、水澤から川崎理學士が來られ、一兩日滞在せられましたが、中旬には山本臺長は東海地方へ出張せられ、十九日からは森川千田兩氏が滿洲へ出張せられたなど、可なり人々の動靜がありました。

夏期の志願助手希望者は合計九名ありましたが、其の中から、山邊、鹽見、原田、西(女史)の四氏が七月下旬から花山へ來られることになりましたので、初め氣遣はれてゐた夏休み中の淋しさも無く、毎日、山の上は、なかなか賑やかなものです。八月九月には又、別の人々が來られる 予定です。

七月末には流星の小嶺氏が來られ、四五日宿泊されました。其の間に流星の觀測もされました。近頃の大發見は、稀代の鋭眼の持ち主鹽見君が發見されたことです。或る批評によると、中村氏以上とも言はれます。將來、流星や變光星の方面に活躍されませう。

八月一日からは、大學の天文教室で、夏期講演として山本臺長の「天文學一般」が開講され、合計四十八名の人々が遠近からやつて來て熱心に聽講されました。同時に大學内で開かれた諸種の講演のうち、この「天文學」の聽講者が一番多數だとて、庶務課長始め、大喜びでした。

八月八日には水澤の山崎正光技師が來觀せられました。十七日から山本教授は倉敷行きで不在。二十一日から暫くは神戸の改發氏が來られて、天體寫眞術の研究をせられます。

柴田氏の25センチ F₈ といふ優秀機が目下組み立て据え付け中、